六、結び

このようにみてくると無常観の頂点として詠まれる釈教歌は、一時にして成立したものではなく、前期万葉の時代からその進展の跡を見ることができる。単なる仏教用語の使用の時から、現世の離脱、厭世思想、そして人生観、述懐の域に至って、生と死の極限状態の場に接し来世観が生まれる。さらに自然の常住と人間の無常との対立によって、仏教思想が盛んに詠まれる。山上憶良八〇四、八〇五、八九七、九〇二の中で老いていく姿を概念的な形で歌っている。そこに無常観の進展の跡がうかがえるのである。家持は憶良のような素朴な場でもないし、旅人のような悠然なものとも違っている。万葉後期になって、いわば孤独な世界で感傷性のある自然に対して、一人耳を傾ける姿勢をとっている、家持の無常観は、万葉集における頂点でありうる。

以上のように理解することが許されるならば、万葉集においては仏教的色彩がかなり現われており、その意味で釈教歌の源流を認めてもよいのではないかと思う。

萬葉集略解の方法

――巻三の述作をめぐって――

河野頼人

加藤千蔭の「万葉集略解」について荒木田久老は栗田土満宛書簡（寛政八年十月四日）に、

「江戸千蔭子万葉考五冊出板いたし候由本居氏より被申聞候。肥後の長瀬真幸と申仁に承り候処千蔭者先師校合書入本を所持いたし居申夫江本居翁の説を加註し候而已に而珍説も無之由承り申候。愚考とは大きに違可申と存居申候故三ノ巻出板いたしかゝり申候）（『荒木田久老歌文集並伝記』四三七・八頁）

という。この中で賀茂真淵の校合書入本をもとに本居宣長の説を加えて成ったことをいっているのであるが、中村幸彦博士は、「真淵の万葉考を後に刊行した、そして千蔭に接近もして居た真幸の咄は略解の現姿からしても事実であらう。」（「久老の放誕」、「国語国文」十三の九、七一頁）といわれている。又、後年のものであるが「信濃漫録」（享和元年）に、

「近ころ略解といふものに或人の説とて山鳥の尾呂の鏡とは山鳥の尾に光あるをいひて下の刀奈希倍美（ママ）はとらふ（捕）べみの誤にて山鳥の尾の末の光を見せて人をたぶらかすといふといへるはい

と〳〵うきたる説にて取に足らず尾に光明あるをいかて鏡かけとはいふへきや古学者の万葉を解得ぬ可レ憐可レ歎右の哥は初めの二句ははつをといひ出む料の序也」（前掲書七五頁）

とある。略解（14・三四六八）に、「宣長云」とした中の「或人」の説を批難しているのである。久老の反宣長的態度が露骨になってからの誹謗的文章としても、久老の略解評価も厳しいといわねばならない。

しかし、川喜田常道が、略解は「万葉考の説と、吾師（注、宣長）の説と、わが友久老か考へを除ては、ひとつも取べき説なし」（「万葉集墨縄」橘守部全集巻一の三四頁）という如く、宣長を通してではあるが、久老説に負うているところ少くはないのである。猶、常道の言は守部が「こは憤れる処ありての、いひ言」（同右）というように、千蔭の功にことさら目をつむった感じもないではない。

そこで主として国立国会図書館蔵千蔭自筆略解稿本（以下、稿本略解刊本は刊本という）によって巻三を中心に千蔭の注紀を考えてみたいのであるが、先ず書誌的なことを整理すると、村田春海（万葉集後続記序）に

「寛政のはじめつかた、信夫道別、安田躬弦などと共に、……万葉集かうがへよむ事ありき。……さて三年ばかりを経てよみをはりたる後に千蔭筆とりて略解をばしるしたりき」（有朋堂文庫六三四頁）

といい、刊本の奥に、

「此万葉集略解すへて三十巻寛政三年二月十日より筆を起して同八年八月十七日に稿成れりさてあまたゝひ考へ正して同十二年正月十日までにみつから書畢ぬ　橘千蔭」

とある。寛政三年二月十日起筆、八年稿成り、そして前掲久老書簡にある如く、八年十月には巻五までの一帙が上梓されていた。

稿本をみると、巻一の表紙に、

「壬子三月廿八日清書早
四月十九日一校（朱）
五月十三日再校了」

とある。壬子は寛政四年（猶「元暦本校合の事」の字もある。巻三の稿本には識語はない）。

寛政三年十二月五日、千蔭から初めて、「万葉考」を継ぎたいという志を述べ「万葉集玉の小琴」の説の引用の許しを求めた書簡を受けた宣長は、翌四年正月六日、祝福激励する返書を送った。以後千蔭は稿本の成るごとに宣長に送り、宣長は考案を書き添えては返すのである。すなわち、寛政六年四月二日、千蔭は宣長に、

「万葉集略解一二先中清書為書候間入御覧候」（中村幸彦「万葉集をめぐる国学者の生活」、『万葉集大成・11・二二一頁所引）

と送っているのである。以下詳しくは「狛諸成の万葉考増訂と加藤千蔭」（拙著『万葉学研究・近世』一七四頁以下）にゆずるが、巻一の稿本は、宣長の説を示される以前のものということが出来る。稿本にある宣長説は宣長の考案が加えられ返稿された後の書入である。そして、稿本は又考察が加えられていくのである。猶、稿本は宣長に示したそのものではなく控えであろう。

右について、かつて紹介した「本居翁万葉説」（前掲拙著所収）によって一二例をあげてみれば、「夕庭伊縁立之」（1・三）を稿本は考によって「いよせたたしゝ」と訓んでいるが、刊本は「いよせた

てしし」とある。これは宣長の、

「タヽシヽト訓ムトキハ天皇ノミツカラ立チ玉フ事ニナル也弓ヲタテ玉フ事ニハナリカタシタヽシハタチト同シサレハタチトタテト自佗ノタカヒアリ」

に従っているのである。

「念曽所焼」（1・五）を稿本は考の「おもひそもゆる」によったが、刊本は宣長の「……塩ノ如クモユルトハイヒカタシ塩ハモユルモノニ非ス」の説に従い「……やくる」と訓んでいる。

「白妙能衣乾有」（1・二八）、考は板本の「さらせり」を非とし「ころもほしたる」と訓み千蔭もこれによって稿本を書いているのであるが、宣長は、

「四ノ句衣ホシタリト訓ヘシルニテハ上トカケ合ワロシ」

といい刊本は従い、ここに千蔭はこの歌の真価を味わこうとが出来たのである。

猶、以上あげた宣長説は出典不明。

さて略解巻三であるが、稿本には識語はない。しかし宣長に示す前のものであり、宣長説は書入や貼紙等によって加えられている。

そして、巻一・二の稿本は寛政六年四月二日宣長に送り（前掲書簡）、巻六の稿本が千蔭に返却されたのは同七年七月二十日（奥山宇七編『本居宣長簡集』二一九頁）、それに巻五までの上梓は同八年八月から十月の間であるから、巻三が刊本の形にほぼ完成したのは臆測であるが同六年後半から七年にかけてであったろうか。

そして千蔭は宣長によって久老の説を知ったのであった。久老の万葉学は「万葉考槻乃落葉にみることが出来るが、槻乃落葉は略解巻三の上梓より遅れ寛政十年三月の出板である。しかし久老は「天明八年六月廿二日」序を草し、同年十月二十四日の久老宛の書簡に宣長は、

「別記の内、スメロギノ御考、殊ニ甘心仕候」（『宣長書簡集』八一頁）

と槻乃落葉の内容にふれている。夙く大体は出来上っていたと考えられる。そして宣長は千蔭に、寛政四年十一月十一日、

「荒木田久老（山田人、俗称宇治五十槻）万葉之考見出候故、入二御覧一候。久老は先年故大人へ入門之男にて、元来才子に御座候処、……先は右万葉ノ考入二御覧一申度、如レ斯御座候」（『宣長書簡集』三四三頁。ただし寛政某年。四年は「万葉集をめぐる国学者の生活二二〇頁の推定による）

と略解述作を聞いて久老説を紹介している。そして以後も稿本の返却とともに久老説を書入れては送っているのである（寛政十年四月五日、同十一年六月十日、『宣長書簡集』）。

さて千蔭の稿本は、ほぼ真淵の訓と注文（考、そしてその草稿ともいえるもの）を下敷にしているといってよいであろう。

そしてそれは、「名積来有鴨」（3・三八三）について考「ナヅミクル鴨」とあるが稿本「なつミきたるかも」。金刀毘羅宮蔵真淵自筆書入本万葉集をみるに「キタル」と書入れているのであり（これは「万葉童蒙抄」の訓であるが千蔭は参照していないと思われる）、この稿本の訓は真幸のいう真淵の校合書入本から得たものと考えられ、こうした例は多いであろう（刊本「なづみけるかも」）。

又、「淵者不成而淵有毛」（3・三三五）を「せとハならすてふちにあるかも」と訓み「毛ハ誤にて毳なるへし」という稿本の誤字説は、刊本では真淵説といっているのであるが考にはなく、右と同様

に考えてよいであろう。

しかしながら千蔭はその所見を示してもいるのであって、例えば「焼火乃保爾曽出流」（3・三二六）について稿本「たくるほの」とある。刊本「ともすひの」と訓み、考「焼火乃」、槻乃落葉「トモスヒノ」と一致し、刊本の注文も亦両者と一致しているのであるが、千蔭は最初「火」を「ほ」と訓み「たくるほの」の新訓を考えてみたのであろう。稿本に「古しへ 日をひといひ火をハ専らほといへり」といっている。ただし「たくる」には拠りどころはない。

又、「吾者不所忘」（3・四三一）を稿本「わすられなくに」と訓み刊本「わすらえなくに」（考「ワスラエナクニ」）とあるのであるが、他にも「相見之妹者将所忘八方」（3・四四七）を稿本「わすられめやも」、刊本「わすらえめやも」。「所忘目八方」（11・二四九六の一云）を稿本「わすられめやも」、刊本「ワスラエメヤモ」等を拾うことが出来る。これらは万葉集の仮名書例はみな「え」とありながらその用例をこえて「れ」と稿本は訓んでいるのである（「和周良延爾家利」（5・八八〇）、「忘枝沼鴨」（13・三二五六）等は、「え」と訓んでいる）。猶後述するが、これには千蔭の好尚といったものによるところがあるのではないか。

「吾将枕」（3・四三九）を稿本「われハまきなん」とあるが、「われハまきなん」は稿本の新訓であろう。刊本「わがまくらかん」これは、真淵説を下にしながらも従いがたいものについては自説を示そうとしたのであろう。

しかし以上のような説も、その裏づけとなる論証がないため従いがたい点もあり、又千蔭としても思いつきめいたものがあるのではないか。従って他の拠りどころを示されれば従っていっているのである（『本居翁万葉説』について」参照。前掲拙著所収）。

そして略解がもっとも大きく影響をうけているものは宣長説であった〈注1〉。

刊本巻三に宣長の名をあげて引用した説は五十四例。これを稿本にみるに、一例（3・三九四）を除いては稿本清記後の書入であって、宣長に問うことによって得た説であるといってよい。

三八四は「義之」について、千蔭は「翁の別記に委しけれといまたし宣長ハ……」（稿本刊本同文）と、考が「象之」の誤りとしているのをとらず宣長が王義之の連想による義訓としたのに従っているのであるが、玉の小琴をみて宣長に書簡を送った千蔭の既に知っていた卓説であった。

そして宣長説は一例（3・三七〇）以外従うべき説として引用或いは考に対する有力な一説としてかかげられているのである（宣長説によっていながら掲出の万葉本文の訓や用字を改めていないものもある）。

例えば「家待莫国」（3・四二六）について、稿本、考の誤字説をとり初め「いへまたまくに」と訓んだのであるが、この欄外に「……この莫を古本真とあれハ翁説論なくよろしきか如くなれとも」と「宣長云」を書入れ訓を「なくに」と訂正している。刊本はこの宣長説を引いて旧訓に戻り、注文も全面的に宣長説によっている。ただしこれは真淵説が正しいというべく、宣長の「いへにまたんといふをかくいへり」の解釈は、むしろ真淵説によってこそ成り立つ。

又「冷者」（3・三四七）を稿本「さふしくハ」と訓み、「遊ひの道ハ万にわたりていふさふしくハ友なきをも心に愁有をもかね云」

とあり、そして、

「宣長ハ冷ハ怜の誤にてたぬしきハと訓んといへりしかるへし」

と書入れている。刊本は右の稿本のすべてを併せて注文とし、掲出本文は「冷者」としているのであるが、千蔭は「たぬしきハ」に心惹かれているのである。

ここをいかに訓むかはこの讃酒歌をどう享受するかに関わることである。稿本は考の「冷者ハ不楽不怜なと書てすさましきを云〉」をうけていると思うのであるが、宣長説は玉の小琴にみられ真淵説の批判もしている。槻乃落葉にもほぼ玉の小琴と同文があり「怜者」と訓み、「巻ノ十七に、遊内乃、多奴之吉庭爾云云と見えたり」の例歌をあげている。

千蔭は宣長説によって、この讃酒歌を積極的に明るく酒の徳を讃えたものとして鑑賞したのである。

三七〇は、「雨不零」についてこのままの本文をかかげ、

「宣長は零は霽の誤にて、あめはれずならん、……按るにあめはれずの詞もいささかおだやかならず、雨不の二字深の字の誤にて、こさめふりならん」

と「こさめふり」といっている。これは稿本の注文の上に貼布された中にみられるものである。

槻乃落葉は「雨不霽」と「本居氏のいへるにしたがふ」のであるが、頭書して「或人の考に……深の誤とし、零、今本のままにて、こさめふり、……此考よきに似たり」という。略解の説を知って頭書したのであろう。そして「万葉集古義」に、「雨不零は、略解に」と右を引き「さも有べし」とあるのは、文献の裏づけはないのであるが、略解説による時、小雨が降って「とのぐもる」と合理的な解釈の出来る点が支持されているのではないか。これは後述する千蔭の方法に結びついていると思うのである。

次に久老説について。刊本に久老の名は十例、しかも好意的にとりあげられている。かつ久老と明記しないで槻乃落葉と一致しているものが多い。「若し御取も被〉成候はゞ、久老之名御出被〉遣候様に致度候」（寛政十年四月九日、『宣長書簡集』二八三頁）といわれていたとすれば不審であるが、宣長から間接にえたため中には分明でないところもあったのであろう。

さて先ず、「荒木田久老がもたる古本」（3・二三七）、「久老のもたる古本に」（3・二七三）等の「古本」であるが、略解の校本については、『万葉集美夫君志』に、

「古本考所引荷田本宮本代匠記所引拾穂本季吟所引古本古葉略要集考所引元暦校本」（首巻の二五頁）

とある。略解凡例をみるに、右の外、

「世の常にあなる活字をは一本とて挙たり」

といっている（古葉略要集について凡例「東万呂翁の僻案抄翁の考などによれり」、そして「古葉類聚抄」をあげ「おのれも写せりかの略要集といへるとは異なるにや詳に知かたしかれ此解には先翁のしるされたるまゝにせり」）。

そして、木村正辞が「元暦校本のみ原本に就いて引けるなり」（同右）というそれは、久老が校合した本が、「後この校合本の写本江戸に来りしかば、寛政三年十一月には、加藤千蔭これによりてその所蔵本に校合を加へ」（佐佐木信綱「古河家本元暦校本万葉集」、『万葉集の研究・第二』五一頁）たものであった。そして、巻一の稿本の表紙に「元暦本校合のこと」とあったが、略解は寛政三年二

月十日の起筆であり、元暦校本はその途上から略解に参照されていくのである。

又、凡例に「おのれも写せり」という「古葉略類聚抄」は、大久保正氏は、寛政六年の書写、略解述作のためであろう。そして略解には「古葉略要集」として考所引によるものと、この写本によって「古葉略類聚鈔」としてかかげるものの二通り混っている。これは転写の間に種々本文が乱れて来ていたため、むしろ別本の如く考えて引いたのではあるまいか（『本居宣長の万葉学』二〇九～一〇頁）といっておられる。

これも元暦校本と同じく途上から入っていくのである。稿本の凡例には刊本の「古葉略要集」の項はなく、巻三をみるに「古葉略類聚鈔」の名は一例みられ、「国之三中従出之有不尽高嶺者」（3・三一九）に、稿本「出之ハ出立なるへし」と内証による本文批評をしているが、刊本「出立今出之と有は誤也、古葉略類聚によりて改つ」と、本文批評の拠りどころとなっているさまをみることが出来る。

こうしてみると、異本の大切なことは知りつつも略解起筆の際校本は一つもなかったのであり、引用の校本には孫引が多く、かつ一つ一つについての認識も確かであるとはいいがたいところがある。

こうした中の「古本」であるが、稿本に、「強話登言」（3・二三七）について、

「末の話ハ語の字の誤なるへし」

と書いて、消している。そして「鵠佐波二鳴」（3・二七三）について、稿本、

「鵠和名抄久々比とあれと五雑俎鵠即是鶴也とあれハたつと訓てよろし」

とあるが、刊本、前者、「強話登言」とし、

「荒木田久老がもたる古本に語に作れりとぞ、然らば話は誤とすべし」

後者、刊本に、

「久老のもたる古本に鵠を鶴に作る」

を加えている。

さて、「話」を「語」に作るは紀州本のみ。後者も亦紀州本のみ。真淵も紀州本を利用しており（孫引ではあるが―『万葉考』の校本」三七頁、前掲拙著所収）、考に「古本には強語と有話は語か」とあるのであるが、千蔭のよったそれには「古本」の名はなかったのか。後者、考「鵠はくゞひの事ともすれと比哥にはことともなく鶴に用ゐたり」と異本にふれるところはない。千蔭は、久老の古本に拠りどころを見出して、稿本の説の補強をしているところがあるのである（猶久老の「古本」は紀州本系とのみいいきれぬところがある。後考を期したい）。

次に久老説の摂取であるが、一例あげてみると、「皇者神二四座者天雲之雪之上爾廬為流鴨」（3・二三五）について、初句を稿本「すめろきは」と訓み「おほきみは」と朱で書入れ、刊本「おほきみは」とする。

「おほきみは」は考が初めであるが、千蔭のよったそれにはそうなかったのか（「万葉新採百首解」は「すめろぎは」）、或いは考の従うべき点には従いつつも、これには説明がなく旧訓をとっているのであろうか。そしてこの「皇」の訓について既述の如く宣長の賞讃した久老の研究があるが、その説くところは、

「おほきみとは、当代天皇より、皇子、諸王までを申称なり…

…さて須米呂岐とは、遠祖の天皇を申奉る称なるを、皇祖より受継ませる大御位につきてハ、当代をも申事のあるを……」（槻乃落葉別記」

とあり、刊本の訓は槻の落葉の「皇者」に関係あろう。

そして結句、稿本「いほるするかも」と訓み刊本「いほりせるかも」と改めているのであるが（考「イホリスルカモ」）、これについて槻乃落葉は「イホリセルカモ」と訓み、別記に、

「後世、勢流と須流とを、ひとつ意と心得て、せるとよむべきを、するとよめるも多し、今熟考るに、須流ハ、現在より、末をかけていふ意、世流ハ志多流を約めたる意にて過去より、現在までをいふ意なり」

という。刊本の訓はこれに関わりがあろう。

千蔭は以上のように訓むことによって、この人麻呂歌を、「せる」と「過去より現在まで」連綿としてつづく皇統の上に立つ今上の持統天皇を讃えたとみているのである。刊本、

「おほきみは即天皇を申、現神、遠つ神など申て、天皇則神にてましませば、雲ゐにかしこき雷の上にいほりせさせ給ふといふ也」

という千蔭の言は、右を背景にして味わうことが出来ると思うのである（稿本は貼紙して初案は読むべくもないが、貼紙は刊本に同じ。宣長の指導によったものであろう）。

猶この外、巻三、狛諸成・春海説（3・三一二）、春海・村井敬義説（3・四二〇）が稿本になく刊本にみえているが、これらは千蔭の身近の人のかつ余説を並記しているという程度で、注釈の内容に関わるものではない。

稿本の内容は、主として真淵の説によったその意味ではすっきりしたものであった。しかし千蔭はそれに満足せず、宣長との交渉の中から多くのものを加えて成ったのが刊本であるが、それは只に諸説を無批判に引用しているのではなく、これをもとに、自分の考察を深めているところもあるといえるのである。

そこで次に、千蔭の略解述作の方法を述べてみたい。

先ず、「雪驪朝楽毛」（3・二六二）の「驪」には諸説があるのであるが、稿本は真淵の訓を「ふりみだるゆきにきほひてまいりくらしも」と引いて朱で消して、「ゆきはたらなるあしたたのしも」を書いている。刊本は「ふりみだるゆきはたらなるあしたたぬしも」。千蔭は注釈書は特に参照してはいないようであるが、考の訓をみちびく真淵の「驪」を「躍」とする誤字説を、稿本は引いて朱で全部消し、刊本ではこの誤字説をそのまま引き「猶考べし」といっている。千蔭はこの改訓に飽き足らず、「はたら」という用例もありかつ旧訓に近いものをとったのではなかったか。そして稿本「驪ハ馬深黒色とあれハはたらと訓へからす駁の字の誤ならんかしからははたらと訓へし」（刊本同じ）と書入れている。「あしたたぬしも」も用字に近い。千蔭は、霏々と春雪が舞い、庭にははだらに積もった状景としてとらえているのである。ここには出来るだけ伝来の形に従い、意の素直なものに従おうとする態度がみられ、真淵の注釈における奔放な姿勢とはやや異なるものがあると思う。

猶、槻乃落葉は真淵の誤字説をとり、宣長は「驪ヲ波陀良トヨムモ心得ヌ事也」（「万葉集問目」）といっているのである。

もう一例。「常磐成」（3・三〇八）を、稿本「ときはなする」。刊本「ときはなる」と訓んでいる。初め考の「ナル」によったが、そ

の後宣長説によって「なす」と訓み（玉の小琴「ときはなすと訓べし」、槻乃落葉「ナス」）、しかし結局は、

「……と書たれば、なすともよむべけれど、こゝは石とつゞけたればなると訓べし」

としたのである（右端の「る」は朱）。「石とつゞけたれば」と比喩ととらず、常磐である石とみたのであって、これも平易に素直に歌の真諦に近づいていると思われるのである。

先の三七〇もこの例に加えることが出来るであろう。

次に、千蔭の持つ古今的世界に対する好尚が注釈の根柢に無意識裡にも働いているのではないかということを指摘したい。

すなわち先にもあげたが、用例をこえて「わすらえなくに」を「わすられなくに」と訓もうとしているのである。これは「え」の持つ古風さをさけていると考えてよいのではないか。

又、「芽子之花」（10・二一二三）等「之」「乃」「能」の表記のあるものは「はぎのはな」と訓んでいる。ところが四五五「芽子花」と「の」の表記のないものについて、稿本「はきのはな」と初め「の」と訓んでいたものを「か」と改めており、刊本「はぎがはな」である。「はぎ」と「はな」を「が」で結ぶ仮名書例はなく、このように用例の支持のない「はぎがはな」と訓んだのは千蔭が最初であるが、略解におけるその他の「芽子花」の表記の訓をみるに、刊本では「の」「が」が半々になっており、そして例えば「馬並而去来於野行奈芽子花見爾」（10・二一〇三）の「の」と「芽子花落巻惜三競竟」（10・二一〇八）の「が」との間には訓みわけているが理由はなさそうである。

このような用例をこえた訓が統一なくあるというのも、千蔭の語感がこう訓ましたのではなかったか。池上禎造氏もいわれるように、「萩が花散るらむ小野の露霜にぬれてをゆかむさ夜は更くとも」（古今集・秋上）などの中古人の語感が関係しているのであろう（「『梅が花』と『梅の花』」沢瀉久孝編『万葉雑記』一〇二頁）。

そしてこうした好尚は、注釈にあたっても古今歌等を例に利用している。すなわち、挽歌「如是耳有家類物乎芽子花咲而有哉跡問之君波母」（3・四五五）について、稿本、

「花を待じ君ハあらすなりて其花のミ徒に咲たるをミて悲めり古今集にいつれをさきに恋んとか見しといへるに心同じ」

と古今集哀傷歌を引いている。そして稿本、「花を待じ……悲めり」の部分を消して、

「今萩ハかく斗咲て有を咲たるやと待問し君ハうせにたりと也」

と改めているのであるが、刊本では全く改めて、

「此巻末にかくのみに有けるものを妹も吾もちとせのごともたのみたりけるといふは、かく斗はかなきものなるをといふ也、こゝもそれと同じ意にて、終の句より一二の句へうち返して見るべし」

と万葉歌（3・四七〇）の同想歌をあげている。この歌の場合古今歌をあげるよりも歌の理解に適切な挙例であると思うのであるが、一体に万葉歌の理解に古今集以下をもって来ることは場合によって必要でもあり真淵も用いていることであるが、千蔭の場合本質の理解以上に目立つように思われるのである〈注2〉。

その他考になく刊本にみられるものをあげてみると、例えば「和可由都流麻都良能可波能可波奈美能奈美邇之母波婆和礼故飛米夜母」（5・八五八）に、

「古今集に、みよしのゝ大河のべのふぢなみのなみにおもはゞわが恋めやもといへるは是をとれり」（稿本も同じ）

等の本歌取の歌の指摘、同想の古今歌の並記（10・一九三八）、又「白細布我紐緒不絶間恋結為及相日」（12・二八五四）では、

「さて恋結びとは、其恋のかための為に結ぶを云か、古今集に恋の乱のつかねをにせんとよめる意也」

と、古今歌（恋一）によって万葉歌を解釈しているか（この場合適当な例歌ではない）と思われる類いである。

こうした傾向は宣長の中にもあるようで、「礒上丹根蔓室木見之人乎何在登問者語将告可」（3・四四八）に稿本は、

「妻ハいかにありやとむろの木のとハゝいかゝ答んやとをさなくよめる也」（千蔭の文であろう）

とのみであるが、刊本は、

「名にしおはゞいざことゝはん都鳥の類ひなりと宣長いへり、むろの木の我にとはゞといふ意とも見ゆれど、さては終のかの詞にかなはず」

というのであるがこの古今歌は余計なことに思われる。解釈は訂されている。こうした例は他にも拾うことが出来るのである。

そして略解における文学批評であるが、その述作の性格による面もあるかと思われるのであるが自分の批評をみせていることは殆んどなく、考による場合もその文学批評的な部分は削っているのであるが、それは只に簡略を旨とするという以上に、例えば考における赤人の「田児之浦従打出而見者……」（3・三一八）に対する情熱的な文章を削っているのも、千蔭の世界にはややなじみえぬものがあったのではなかろうか。

そして、「物乃部能八十氏河乃阿白木爾……」（3・二六四）について、略解（稿本刊本ほぼ同じ）は、

「近江の故き都べより帰るにつきて、殊に物悲しく思はれしなるべし」

という。この「帰る」以下はたしかに考にもみえる真淵の、

「近江の宮所を見悲て帰る時なれはことにはかなき世の中をおもふへし」

によっていると思われるのであるが、考は猶

「さてゆたかにして雄々敷直くしてあはれふかきはこの人の哥なり」

というが略解はこれにはふれるところがない。

ここは千蔭の筆で評をまとめているのであるが「物悲しく思はれしなるべし」は、筆の節約を考慮しても、人麻呂の歌風の的確な把握と時代をふまえての真淵評にくらべてみれば、表面的にとどまり弱いといえるのではないか。

以上こうしてみると、千蔭は万葉歌の注釈をしつつも、その底にはどこか古今的世界を揺曳させているところがあったのではなかろうか。

千蔭はその歌風を江戸派と呼ばれ、真淵の万葉風に対し、「むしろ古今新古今的に洗練された近世調に時代感覚を表現せんとし」（『和歌文学大辞典』）「雄渾蒼勁の古体よりは、寧ろ流麗温雅の近体を採」（佐佐木信綱『日本歌学史』三四五頁）ったのである。そして、「古への風を詠むとても、あながちに遠き古言を用ゐむとするは悪し」（「芳宜園歌話」、同右所引）といい、又略解の注文中にも、13・三三二三の解に添えて、

「今古風を好みよむもの、猥にことまねぶたぐひあれば……」
（稿本になく刊本において加えられたもの）
というのである。

このような言は、注釈を通して万葉ぶりを標榜する真淵の立場と略解の違いといえるのであり、考の文学批評に必ずしも同調しえないところもあったかと思われるのである。

そして一面ではこれが、宣長的世界への親しみを生み出しているのではなかろうか。

こうして千蔭は、真淵の校合書入本を基に、宣長の説、そして久老の説を紹介され、又それらによって考察を深めることもあって略解を述作しているのである。

そして、簡略を旨とする述作のあり方によるところもあるのであろうが、万葉人の位置に自分をおくというよりも現在の自分の立場からの平明化につとめているのであり、又、万葉歌が古今集以下の歌とは違って持っているものをその述作の過程において闡明するということは乏しいのではないかと思うのである。

＜注1＞「石井氏の調査によると、略解収載の宣長説は五八〇項となって居る。しかし、恐らく之は歌を単位としたものであって、引用の説を単位としての延項数は約七七〇項に及んで居る。」（大久保正『本居宣長の万葉学』二〇六頁）

＜注2＞刊本に古今歌と明記して引用した数を示すと、

巻	略解	万葉考
四	3例	1例
五	1	0
七	4	3
八	2	1
十	5	3
十一	9	7
十二	4	2
十四	2	1
十八	1	0
十九	1	0
二十	1	0
計	33	18

そして、「万葉考」は、刊本のそれが考にあるか否かの数を示している。

＜付記＞片仮名の訓をつけて引用したものは板本、平仮名のそれは刊本の本文である。

かぎろひ考

市村　宏

一

「かぎろひ」とはさても面倒な言葉である。だがまた魅力十分な言葉でもある。